地域の記憶を継承する「学びのプログラム」に関する調査研究
～ドイツにおける事例分析を中心に～

The Perspective of Regional Memory Inheritance through Learning Programs for the Younger Generation, A Case Study Analysis of Community Engagement in Germany

斉藤理*
Tadashi SAITO

Abstract：

The purpose of this study is clarifying; what kind of learning methodology which focuses on the importance of regional memory inheritance is effective for the younger generation at the present, the generation who knows the hard days during and after World War II. is gradually decreasing.

To accomplish these ends, the author of this paper has tried to do hearing investigations, site investigations to some citizen' s associations and cultural organizations in Berlin from November 2018 to February 2019; Evangelische Versoehnungsgemeinde/ Kapelle der Versoehnung, Koordinierungsstelle Stolpersteine Berlin, Der Verein Quartier Bayerischer Platz and Deutsche Stiftung Denkmalschutz, doing pioneering practices of the cultural exchange and the community tourism field.

It was found; the matters of great importance for the effective learning programs are mainly the following two points:

as a first, just standing on the stage and spot of regional history to nurture imagination and emotional development of the youth. And the second, actively making many dialogues with the eyewitness of the times to cause the so-called "cultural dynamism" between different generations and different peoples from former east and west side of Berlin.

キーワード：教育プログラム, 記憶の継承, 文化遺産, 文化観光, ドイツ
Key words：Learning programs for the younger generation, Memory inheritance, Cultural heritage, Cultural tourism, Germany

１：本研究の背景：
文化交流を通し記憶を継承させる仕組みづくり

近年、第二次大戦やその後の冷戦時代の目撃者たちが減少していることを背景に、これらの時代における地域の記憶をどのように継承していけるのか、そもそも誰がその継承の担い手になれるのか、そのための教育はどのようにあるべきなのか、こうしたテーマに社会的関心が集まっている。わが国でも無論そうであるが、この課題認識は広く世界で共有し得るものであろう[i]。

地域の記憶の継承手法には、確かにいくつもの可能性が考えられるが、単に当時の関連文書や証言の記録等、いわゆる「ドキュメンテーション」のレベルのみでは、例えば戦中戦後時代の雰囲気を全く想起できない世代が増えていく今日、実感を伴ってこれを理解し、継承していくことは困難になりつつある。いわゆる「歴史」として編まれた資料を追っていくことはできるであろうが、個人ベースやコミュニティ単位での、細分化され複雑に絡み合う記憶群を把握することはなかなか難しい。

そこで、このドキュメンテーションを重要な基盤としつつも、さらに踏み込んで何かしらの実体験を伴い

* 山口県立大学国際文化学部教授　Prof., Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University, Dr.Eng.

ながら地域の記憶を継承させていくことが求められている。なかでも本論で取り上げる欧州ドイツにおいては、「記憶の継承」と「学びのプログラム」とを何らかの「文化交流（多くのケースにおいては観光交流も含まれる）」と関連付けて複合的に推進していこうと試みている事例が多く、大変興味深い。

例えば、ドイツ・ベルリンの地下空間を舞台に地域の記憶継承に取り組むグループ「ベルリンの地下世界」の活動では、戦中戦後に整備された地下構造物、すなわち防空壕や地下監獄、あるいは東西冷戦期、ベルリンの壁の下を貫通させた秘密の脱出トンネル等々、これらのややもすると忘却されてしまいそうな細かな記憶を継承していこうと、これらの遺構を文化交流に活用し、連日多くの来訪者が、同会の学びのプログラムに参加している。むろんツアーガイドの側も熱気の溢れた勉強会を定期的に開催し、学びのプログラムを介した地域の記憶継承が本格的に進んでいる。

また、旧東独地域を中心とする「トラフォ（TRAFO – Modelle für Kultur im Wandel）」と名付けられた文化交流プロジェクトは、とくに非都市部における博物館、図書館、劇場といった既存文化施設のポテンシャルを再確認し、最大限利活用していくという活動を始動させている。都市部に対応して、地域社会の種々の記憶継承に的を絞りつつ文化交流を盛んにしていこうとするパイロットプログラムである。これはとりわけ東西の経済格差を念頭に、旧東ドイツ地域における地域振興の必要性が増していることも背景にある。

そのほか、北ドイツで主に観られる独特のレンガ造ゴシック建築を維持・活用するプロジェクト「バックシュタイン・ゴシック」でも、近年、青少年への教育プログラムに力を入れている。学びを軸に、「文化遺産の保存」―「観光交流」との間のトライアングルの構図を形成しようとしているのである。

このように、何らかの学びのプログラムを活かしつつ、地域の世代間の、あるいは来訪者―地域住民間等の文化接触の機会を創出していこうとする傾向をドイツ各所において確認できるのである。こうした動向を踏まえながら、本論では以下に、筆者が実地調査を実施した4箇所の事例を挙げつつ、どのような取り組みが有効なのかを検証し、今後の課題についても考察していく。

２：負の記憶に触れるバイエルン広場地区の小学生

先ず、子供たちが負の記憶に触れ、自ら記念碑を制作しているという、ベルリン市における興味深いケースについて考察したい。

ベルリンの西部に位置するバイエルン広場地区は、1930年代当時、16,000人ほどのユダヤ人（とくに中流階級の経済的に豊かな層を中心に）が暮らし、ベルリンにおける一つのユダヤ系コミュニティの中心だった。ところが、1938年11月９日の「水晶の夜」が訪れ、同地域にあったユダヤ教の礼拝所（シナゴーグ）も爆破されてしまう。これは戦後、廃墟の状態となり、その後の1956年にはすべて撤去された。

一方、同地区のレックニッツ小学校の敷地[ii]に、ちょうど上のバイエルン広場地区のシナゴーグがあったことがきっかけで、同地域のユダヤ人コミュニティについて子供たちが深く探究する活動が開始された。

1990年代から、まず６年生の児童たちを中心に、戦時を知る生き証人たちを小学校に招き、直接ヒアリングするというプログラムが行われた。指導したのは、当時のクリスティーナ・ニクラセン校長だった[iii]。この対話では、児童たちが自らの目線で様々な質問を投げかけていく。それは例えばこんなやり取りだという。

「この地域では何人犠牲になったのか」、「当時なぜ逃げずにドイツに留まったのか」といった概要を問うものから、「周りの非ユダヤ人の友人たちから避けられている、と感じましたか？」といった学校内での人間関係に関わる、核心に触れた質問もある。

それに対して、語り部として招かれた長老たちも、「最初はなんとなく疎遠にしている様子が感じ取られましたが、その感情が次第に敵意に発展していきました。これが、あとで振り返ればその後のエスカレートしていく疎外（Entfremdung）の始まりでした。ですから、最初の小さな差別の感情を起こさないようにすること、これが何より大切なのです」といった時代の目撃者ならではのリアリティに満ちた返答をしてくれる。

[写真1：レックニッツ小学校の記念碑]

2a：自ら調査し、記念碑を制作する

こうした経験を通し、子供たちのユダヤ社会への探求心は増し加わり、「戦争の時代のように料理をしてみる」プログラムや、破壊されたシナゴーグの建物の平面図を構内の地面にテープで記し、空間を再現してみる、模型を作成してみる、などが実施されていくが、やがて自ら「記念碑」を建ててみるという方向（「Denk-mal」プロジェクト）に発展した。11歳から12歳の子供たちが取り組んだ。

1994年から、地域の歴史資料室にて、強制収容所に送られたユダヤ人のリストを調査。その後、子供たちが自ら、犠牲者の名前、死亡日・場所（アウシュヴィッツ、リガ、テレジエンシュタットなど）を土色のブロックに刻み、これを「石碑（Denkstein）」とし校庭の一角を使って1.5メートルの高さに積み上げていったのである。すでにこの石段は1,000個近くになり、往来からも確認できるほどの大きなモニュメントになっている[写真１]。

ここでの重要なポイントは、石碑を作る対象者を膨大な犠牲者のリスト[iv]から子供たち自身に自ら選ばせている点である。子供たちはリストを目で追いながら、「自分と同じ名前だから」とか、「誕生日が同じだから」、「自分の家と住所が近い」といった何らかの自分との接点を手掛かりに対象者を選択し、地域のボランティアにも協力してもらいながら石碑を一つ一つ制作し、設置する際には敷設式も行う。中には、感極まって泣き出してしまう子供も出てくるという。それだけ、このプロジェクトを通し、地域の歴史に深く関わりを持っていることの証左であろう。

2b：学びのプログラムに対する外部からの評価

この小学生による「Denk-mal」プロジェクトは、数々の著名人たちの目に留まり、多くの文化賞を受賞している。1998年受賞のアンネフランク研究所・エディス・ウルフ賞、2012年、ドイツのユダヤ人の過去の記憶を保存することに顕著な貢献をした人々を称えるオーバーマイヤー・ドイツ―ユダヤ歴史賞などがその一例である。

３：デメニクによる「つまづきの石」プロジェクト

上の例のように、子供たちが自ら主体的に「記憶の継承者」になるという意識を高め、その具体的な手法を学んでいくという教育プログラムは、「つまづきの石（Stolpersteine）」と名付けられたユダヤ人迫害の記憶を継承するプロジェクトでも見受けられる。

このつまづきの石とは、わずか10センチメートル四方のコンクリート片の表面に、1930～40年代、ナチスによって迫害されたユダヤ人やシンティ・ロマ人等の氏名、生没年、簡単な略歴を刻み、犠牲者がゲシュタポらに拘束される間際まで住んでいた旧宅前の道路に埋設していく、というプロジェクトである。

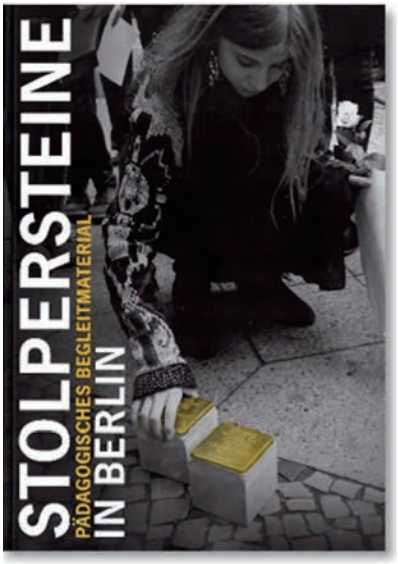
ドイツ人の芸術家グンター・デメニクが1996年から手掛けている。ドイツ国内はおろか、今日ではヨーロッパ中に埋設地域は拡大し、じつに７万個以上のつまづきの石が埋設された[v]。この数字と対象範囲の大きさを見るだけでも、第２次大戦中のナチスによる暴政の酷さが改めて思い起こされる上、悲劇から80年以上経過した現代においてもなおこのテーマに大きな関心を寄せ、実際に資金面を含め様々な形で支援する人の輪が拡がっていることに驚きを覚える[vi]。

このプロジェクトの運営スタッフが近年もっとも気にかけていることは、「負の記憶の伝承方法」である。時代の証言者が年々減っていく中で、いかに次世代にこの悲劇を伝えていくことができるか。つまづきの石を単なる物体的なモニュメントとして遺していくのではなしに、個々の石に内包・内蔵された負のエピソードをいかに臨場感を伴って継承していくことができるか。その担い手になれるのは誰なのか。これらが課題なのだという[vii]。

3a：学校で利用できる学びの手引きを提供

そこで、このプロジェクト運営組織が手掛けたのが、諸所の学校で利用できる教員用「つまずきの石プロジェクトの教材」の作成である［写真２］。『ベルリンのつまづきの石―教育の手引き』[viii]と名付けられたこの教材の優れた点は、迫害の歴史について、従来の様に知識として修得させることを促すのではなく、むしろ実際につまづきの石を敷設する方法が記され、その為にどのような基礎的な理解が必要で、史実を確かめるためにどのような資料に当たらなければならないか、そうした具体的プロセスが記されている処だろう[ix]。

「聞いて知っている」という段階から、「記憶を継承する主体者」へと踏み込んで考えていけるように構成されているのである。それはなぜか。迫害へと至ったプロセスを実際に見聞きした同時代人たちが次第に居なくなっていく現実を踏まえ、負の記憶を風化させず「自ら」伝承する姿勢を学び取ることが肝要であると捉えているのである。



[写真2：教育の手引きの表紙]

3b：主体的に考察できるようにするための工夫

負の記憶に関わることであっても、子供たちが主体的に考察できるようにするため、このテキストは主に以下の２点に比重を置いていると筆者は分析している。

一つは、あくまでも犠牲者たちの「個人的な」エピソードに触れていくことを促している。個々の具体的な運命に向き合う方が、当時の雰囲気をまったく想起し得ない世代にとっては、迫害された人々の状況を想像しやすくなるからである。一方で、この方針は、かなり挑戦的でもある。きわめて残酷なエピソード、すなわち虐待、拷問、殺害などの具体的シーンから目を逸らすことが許されなくなるからである。子供には衝撃的だから、と例えば「迫害による犠牲者は何万にであった」というような概論に抽象化させたり、ディテールを省略したりすることができない。

したがって、この教材の冒頭には留意事項として、本教材を用い、個々人の悲劇を探究するのは少なくとも12歳以上の児童であること、と明記されている。この点からも、この教育プログラムが生徒たちにとって受動的なものではなく、あくまでも主体的に理解し、行動できるようにすることを前提としていることが伺えるだろう。

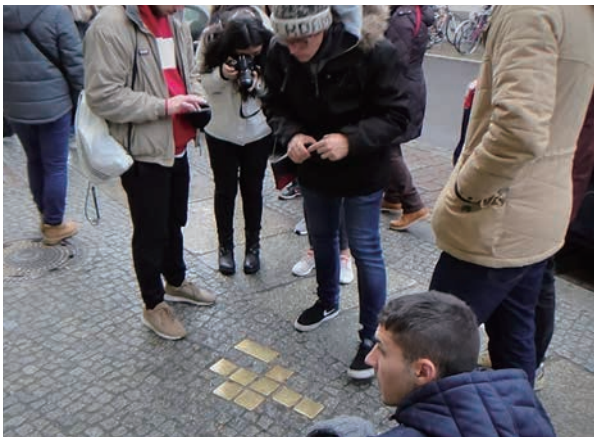
二つめは、当時を「社会構造」の視点から理解させようとしている点である。どのような政治プロセスが折り重なってあの独裁体制が成立し、皆一様に迫害を許容する世論が形成されたのか。さらに、どのような世論操作・プロパガンダが巧妙に発せられ、それがどのように作用し、迫害を正当化する悪しき法整備へと事態は進んだのか。こうした「泊害の構造」をつぶさに分析させるよう工夫しているのである。

迫害を促進した「構造」を理解させる、やはりこの点が戦争を想像できない世代にとってはきわめて重要である。これによって、第一に、ナチス時代を振り返るだけではなく、むしろ今日における社会の動静と「構造的」に比較することができ、かつての独裁構造を生み出さないよう留意することができる。加えて第二に、迫害の歴史を強制収容所という遠隔地で起こった局所的な出来事として矮小化させるのではなく、じつは人々の暮らしの舞台で周到に温められ、身近な環境の隅々に侵食し肥大化していったという「構造」を理解することができるのである。

3c：つまづきの石を巡る解説ツアー

上の教材化は、様々な教育の場で有益な成果を生んでいるといい、それに伴い、学校単位でつまづきの石をめぐる解説ツアーを依頼するケースも増えている。このツアーは、教員や生徒の要望に応じ、つまづきの石プログラムを支援する地域連絡事務所などが窓口となって実施されている。ツアー参加者は、つまづきの石を巡りつつ、犠牲となった人々の生き様に直接的に触れ、迫害のあまりの不合理さにやるせなさを覚え、細分化された歴史の断片から帰納法的に当時の社会構造そのものを想像していく。

筆者は、2018年12月に実施された解説ツアーに同行してみたが、その参加者は、遠路はるばるスペイン・マヨルカ島から来訪した十数名の高校生たちと教員だった。彼らは、ガイドの話を聞き漏らすまいと真剣に耳を傾け、記録写真を撮り、また熱心に質問もする。自発的に探究している姿がそこにはあった[写真３]。なぜ、これほどまでに意欲的なのか。何ゆえつまづきの石に関心を持ったのか。その経緯は、おおよそ以下のようなものだったという。



[写真3：熱心に視察する高校生たち]

3d：つまづきの石を埋設したマヨルカ島の高校生たち

マヨルカ島パルマ市の高校、モンティ・シオン校の教員アイーナ・ロセッロ氏が、たまたまドイツにてつまづきの石のことを知り、帰国後、生徒たちに関連する教材を使って紹介。すると、その中の一人が手を挙げ、曽祖父がじつはマヨルカ島から強制収容所に送られていたと発言した。教室でのこの出来事がきっかけとなって、ロセッロ先生も生徒たちもつまづきの石の存在が急に身近に感じられ、ナチス時代の迫害に遭ったマヨルカ人たちのことを各種の記録資料をひもとき調査し始めたという。その後、地域の歴史協会や行政当局の協力も得つつ、何か月にも亙って犠牲者の物語を詳らかにし、2018年12月16日、ついにつまづきの石をのべ14個、マヨルカに埋設できる運びとなったという[x]。その埋設式に際し、高校生たちは実際のつまづきの石をベルリンで確かめていたのだ。

街角でつまづきの石の存在を認識したこと、戦時の記憶は遠い過去の話ではなく、じつは関係者の個人的物語と接点を持っていたと判明したこと、これらの出来事が有機的に結びついて、さらなるつまづきの石の敷設へと発展的に繋がっていった。これは、発案者のデメニク自身が強くこだわってきた「あくまでも個人的な記憶を留めていく」、ならびに「私たちが日常的に行き来する生活空間にこそ埋設していく」というポリシーが功を奏した結果と言えるだろう。かくして、戦争体験のない世代の教員にとっても生徒にとっても、つまづきの石は最良の学びの素材として役立ったのである。

つまづきの石のプロジェクトチームは、つまづきの石をひとつの「社会的な彫刻」と呼び、今日の人々の意識や行動を変えていく契機になることを期待しているが、その効果性は、上のマヨルカの高校生たちの一事例からも既に明らかになろう[xi]。

4：ベルリンの壁の記憶をどのように継承するか

第二次世界大戦の証言者が時代と共に減り続けているのと同様に、東西冷戦時代の終焉から30年を経過した今日、ベルリンの壁があった時代の証言者も減少し続け、この記憶継承もひとつの社会課題になっている。

そこで、「ベルリン・文学イニシアチブ（LIN）」を主宰するビルギット・ムルケ氏とユリア・バロー氏は、子供たちが聞き手となって証言集を作成するというプロジェクトを発案した。

これは、「一つの国が分断されていた」という状況をどうしてもイメージできなかったり、「そもそもベルリンの壁って何？」という素朴な疑問を抱いている11歳から18歳までの子供たちのべ26名が、ドイツの東側／西側に暮していた計25名に分担してインタビューに赴く、という企画で、その成果は2015年、総170頁の書物『二分化した見解[xii]』としてまとめられた[xiii]。

ひも解いていくと、子供たちならではの視点から各人の記憶を聞き出し、考察がなされていて非常に興味深い。東ドイツの青少年たちはどんなことに関心をもち、どのような学校生活を送っていたのか、あるいはどんなジョークを話していたのか等々である。計17人のそのような暮らしのエピソードを収録している。

なかには、冷戦時代の暗い記憶、すなわち脅迫・弾圧されたり、阻害されたり、意に沿わぬ行動をしなければならなかった経験を「次世代に伝えなければ」との想いから、初めて重い口を開いてくれた高齢者も居たという。

東西それぞれ別れて暮らし、まったく異なる生き方をしていたドイツ人たち「それぞれの見解」を中立的な「どちらの側の事情も知らぬ世代」として客観的に考察する点、また次世代への「学び」の機会提供というプロジェクトの目的を明確に示唆すること、これらの工夫が重要なのだろう。

これまで「壁」と言えば、劇的なストーリー、つまり東から西側への逃亡成功談や、壁崩壊時、東西の人々が手を結び歓喜に包まれた感動的な雰囲気が伝えられてきたが、今回、子供たちは、むしろ日常生活の実態を知りたいと考えたのだ。

この書籍の冒頭には確かにきわめて重要な分析が記されている。「事実というのは、非常に様々なピースが積み重なって構成されている。したがって、できるだけ多様な声を拾い集めて歴史を編むべきである」と。

なるほど、ベルリンの壁が崩壊したことは大いなる歓喜に違いないのだが、その祝祭性に覆い隠されて、冷戦時代に市井の人々が体験させられた個人的悲劇の数々（迫害、統制、拷問等々）が人々の記憶から消滅してしまったり、あるいは逆に、東側社会の誇るべきエピソードや豊かさ、こうした側面も掻き消されてしまうというのだ。

前者は例えば、スポーツ強化選手のドーピングというネガティブな話題だったり、後者は、東ドイツの方が社会において女性が活躍できる場が多かった、等のことである。きわめて示唆的な切り口である。子供たちは、このインタビュー企画によって地域の人々への接し方、また収集されたエピソードに対する客観的な分析能力を自然と体得しているように思われる。

[写真4：子供たちによってまとめられた証言集の表紙]

4b：子供たちが証言集を作成することの意義

こうした青少年たちの取り組みについては、2018年11月８日に開催されたパネルディスカッション「壁の崩壊ってすごく昔のこと？」（青少年による「ベルリンの壁」調査プロジェクト／会場：ベルリンの壁博物館）の場で、若者たち自身が熱い想いの伝わる報告を行った。なかでも、一人の高校生が放った一言が筆者にはきわめて印象的であった。「様々なインタビュー体験を通して分かったことは、私たちは『歴史』を知ろうと思っていたけれども、私たちが触れたのは『歴史』ではなく、じつは現在進行形のことがらでした」。この発言を耳にしたとき、筆者は、かつては縁遠かった壁の物語に対する子供たちの意識がプログラム前後でがらりと変わり、地域の記憶を身近なものとして、すなわち自らの今日の暮らしと連続したものとして捉えられるようになっていることを明確に理解できた。

冷戦時代における国土分断は、一般的には東西の空間的断絶と理解されているが、この学びのプログラムに接すると、壁無き今日においては、もはや東西の分断ではなく、世代間の、すなわち壁を体験した世代と、壁のある生活を想像できない世代との乖離こそが話の本筋であり、この乖離を埋めていくことは、じつはそんなに困難なことではない、と気づかされる。この隔たりが埋まった瞬間に立ち会えた嬉しさと、学びのプログラムがいかに大きな力を持っているか、という点を実感した。

５：文化遺産を実地に修復する長期研修プログラム

本論の最後の事例として、ドイツ記念物保護財団（Deutsche Stiftung Denkmalschutz）が手掛けている、「記念物保護・活用」と「職人の育成」とを同時に成り立たせるユニークな教育プログラムについて取りあげたい。

同財団は1985年に設立。現在、記念物保護に関わる民間財団としてはドイツ最大の規模を誇り、そのネットワークは大きい。500人以上のボランティアスタッフが登録され、全土に拡がる地域連絡事務所には、のべおよそ80人の地域キュレーターがいる。また220以上の関連財団・基金と協力関係にあり、適宜、支援もしている

すでに4,500件以上の記念物保護事業に貢献しているというから、同財団の果たしている社会的な意義はきわめて大きい[xiv]。

例えば、ドイツ中部の古都エアフルト市の場合は、1325年建造の住居建物つきのユニークな石橋「クレーマー橋」の維持・修復事業に対して金銭的支援の橋渡しや専門的助言等サポートを1993年以来、実施している。このサポートが支えとなって、年間69万人以上が来訪する同市の重要な観光対象として維持・活用されている［写真５］。

[写真5：クレーマー橋上にある保護財団オフィス：これまでに手掛けた事業成果を示すパネルが並ぶ]

ところで、この保護財団のモットーは、記念物の価値に順列・優劣はつけないという点である。農家建築でも村の教会でも工場建築でも、あるいは役所でも宮殿でも、対象物に文化的価値があることには変わりはない。重要なことは、周辺地域の人々が記念物保護の方針を理解し尊重する（Wertschätzung）意識の醸成であるという。実際に記念物修復に携わっている技術者たちも、このポリシーの重要性を強く指摘している。

この方向性を具体的に形作るのは、同財団が手掛ける、子供たちや青少年を対象とした教育プログラムであり、「記念物をアクティブに」や「青少年のバウヒュッテ」などがいくつかが挙げられるが、わけても

独特なのは後者である。

5a：中世の「バウヒュッテ」の精神を受け継ぐ学びのプログラム

青少年のバウヒュッテ・プログラムは、意欲ある若者が、例えば崩壊の危険にあって緊急に処置を必要としている歴史的な建築物や庭園などの現場を訪れ、1年間に亙って建設・工芸・造園などの技術を磨きながら修復作業にあたるというものである。しかも週に約39時間も作業に当たるというのであるからプログラム内容は本格的である。

バウヒュッテ（建設小屋）の名称は、まさしく中世のそれに範をとったもので、徒弟たちが寝食をともにしながら、親方の技を習得していくというかつての精神を受け継ぎ、文化遺産を物体的にだけでなく、技のレベルから次世代へと継承していこうとしている。1999年からスタートし、すでに4,000名近い修了生を輩出し、そのうちの多くが、文化遺産の魅力に触れた1年間がきっかけとなって、実際に記念物保護の担い手として活躍しているのだという。これは大きな事業成果である。

ドイツ全土に地域キュレーターも配置され、地域ごとの文化遺産修復に関わるニーズに対応した研修プログラムを展開している[xv]。

5b：自発的な社会活動を促す支援制度

わが国では、伝統工芸や伝統的建築物の技術継承を担う人材になりたいと志望しても、いわゆる修業・研修期間の経済的負担が大きいこともあって、なかなかそのハードルは高い。支援制度が十分でない為に継承者不足に悩まされているのが実情である。

ドイツのバウヒュッテの研修事業においては、その点、どのように考慮されているのだろうか。成功の鍵となっているのは、「自発的な社会活動の年（Freiwilliges Soziales Jahr＝通称はFSJ）」と名付けられた若者の社会福祉奉仕活動を促す政府プログラムの存在である。

これは、16歳から26歳までの青少年層に参加資格があり、彼らは、自らが希望する文化機関等（例えば記念物・伝統文化保護、福祉サポート、教育活動等々の運営機関）に研修生として属し、原則として1年間の社会活動プログラムに金銭的サポートを受けながら受講することができるのだ。この間、住居費や健康保険など、生活する上で不可欠な月額750ユーロ程度の支給を受けることができるため、経済負担を気にすることなく研修に打ち込むことができる[xvi]。一方、研修生を受け入れる各機関の側にもメリットがあり、志望動機も明確で意欲的な若者が毎年定期的に集まるほか、予算面でも安定した持続的な事業運営を進めることができるのである。

むろん、公的支援を支出する行政当局にとっても、社会的に必要とされる人材を実践的に育成することができるため、この「自発的な社会活動の年」制度を介し、若者も当局も文化機関等も三者それぞれに利のある状況が生まれている。

5c：誰でも分かり易く、専門的な内容を実践的に学ぶことができるようにする工夫

上の「青少年のバウヒュッテ」のプログラムは、この「自発的な社会活動の年」の支援制度を活用している。この制度の規定に依り、1年間のプログラムのうち、計30日間はセミナーの時間に当てて、体験だけでなく理論的なベースも習得できるように時間配分されている。セミナーは数週間ごとに分散して実施され[xvii]、学ぶ内容は、記念物の保護に関わる歴史から、様式の変遷、保存修復の手順・手法、材料学、記念物の保護に関わる法制度など多岐にわたるが極めて実践に即した項目である。それぞれのテーマを専門家が指導に当たり、理論の習得後、指導者から課せられた具体的な課題にグループワークで取り組み・プレゼンテーションする、などの演習が行われている。

一見すると、かなり専門的な内容で、予備知識や特別な素養が必要かと思えるが、じつは誰にでも開かれたオープンな研修で、「特別な資格や経験は不問で、むしろ1年間に亙って研修し、文化遺産の修復現場における作業に従事できる意欲が重要」だという。そのため、専門的な知識と十分な実務経験を積んだスタッフがコーディネーターを担当している。

このように、金銭的な支援制度も整備されている上、誰にでも門戸が開かれた教育に重きを置いたプログラムであることがバウヒュッテ事業の強みである。

ブランデンブルク州の例では、年40名の定員に対し、およそ200名の志望者が選考書類を送っているというから若者層からの人気の高さが覗える。なお、同州のケースでは、参加志願者の8割程度が大学生ないしは、大学入学準備中の若者で、このプログラムの目的・テーマに対する問題意識はかなり高いという。

また受講後、実際に記念物保護プロジェクトに従事したり、建築設計事務所に所属しながら、保護・活用のプランニングに当たるなど、バウヒュッテでの経験

を自らの職業にも有効に反映させることができているとのことで、研修プログラムの社会的意義も大きい。加えて、ウクライナ、ロシア、ブラジル、コロンビアなど、外国からも若者が集まり、参加者同士も相互に刺激し合っているという[xviii]。開催を重ねる毎に人的ネットワークが拡大していくことも、このプログラムの貴重な成果と言えるだろう。

この研修プログラムを支援する人たちの声は年々大きくなり、寄付者も多い。賛同する人々は、将来ある若者たちに社会体験の場を提供することができる点、また、著名なものにプライオリティを与えることをせず、維持・修復対象建造物に優劣をつけない点を特に評価しているという。

６：総括と展望：各種の学びのプログラムに通底する２つの要素

以上、ドイツにおける地域の記憶継承のための学びのプログラム例について考察してきた。第二次大戦前後のナチス時代の記憶を調査し、加えて継承する術を具体的に開拓していこうとする二つの事例、東西が分断されていた時代の記憶をきわめて具体的に聞き取り、分析していくことで世代間の溝を埋めていこうとする一例、さらに、記念物を具体的に遺していく術を若い世代に伝えることを通し、地域の記憶継承を図る、比較的長期間で実践的な学びのプログラム一例について、順にそのプロセスと成果について考察してきた。

今一度、整理してみると、これらの事例には以下の２つの共通点があると考えられるのではなかろうか。

６a：文化的ダイナミズムを生じさせる仕組み

レックニッツ小学校の事例に見られるような、迫害の記憶を語る生き証人たちと、地域の子供たちとの直接的な対話、あるいは子供たちとリスト上に居並ぶ個々の犠牲者たちとの時代を超えた接触。あるいは、ベルリンの壁博物館によるプロジェクトで確認できるような、まったく異なる半生を過ごさざるを得なかった対照的な東西市民と青少年たちとの対話。これらの事例に明らかなように、普段は接点を持たない異相間を学びのプログラムを介して接触させることで、双方にとって新たな知見がもたらされ、より深い「文化交流」の動きを創り出すことができていると分析している。いわゆる文化的ダイナミズムの創出である。

このような文化接触は、子供たちにとってまたとない貴重な学びの機会がもたらされるだけでなく、各種の文化交流を派生させ、さらにこれを支援する人的ネットワークを拡大させている。それはバウヒュッテプロジェクトやつまづきの石プロジェクトに見られるように欧州全域を巻き込む状況にまで発展している。

６b：記憶の現場でこそ観取できるリアリティを追求する

これは、ベルリンの壁プロジェクトやつまづきの石のプログラムにとりわけ顕著であるが、あくまでも記憶の「現場」に立ち会うこと、現場を見聞きした人々と直接的に接すること、こうした要素を学びのプログラムの中核に取り入れることが肝要であると考えられる。

とくに、いわゆる負の記憶をめぐっては、確かにそれらの衝撃的な記憶を隠すことも、あるいは一般化させ抽象的に継承させることもできるのだが、記憶の内容を平板化させることなく、むしろリアリティを常にさらすことにこだわることで、子供たちの自発的な学びへの意欲は高まっているようである。

とくにスペインの高校生たちを惹きつけたつまづきの石プログラムにおいては、「負の記憶の継承」と「観光交流」とが直接的に結びつくことで、史実の今日的な意味を考え、平和を希求する動きを創出することに成功している。その際に重要なことは、「歴史」という公のレベルではなく、あくまでもそれぞれの出来事が起こった現場においてのみ見聞きできる個々の「記憶」をテーマにすることである。記憶を学びの対象としたときに初めて上の臨場感は実感され得るからである。

この点は、とくにベルリンの壁博物館のプロジェクトにおいて顕著であった。東西分断という出来事を予定調和的にひとつのストリームに集約させることをせず、敢えてばらつきのある個別の物語の抽出にこだわることによって、記憶という細分化された歴史の断片を拾い上げていく必要性を子供たちは体得していくのである。

総じて、各種の「学びのプログラム」が軸となって、「地域の記憶の継承（文化遺産の保存等も含む）」―「文化交流」との間のトライアングルの構図が均衡をもって形成されるとき、若い世代の学びにとっても、地域社会にとっても有益な成果をもたらしていることが確認された。とくに文化交流・観光交流という目に見える成果があることも、プログラムの持続性に必要なことと指摘できるだろう。

また「学びのプログラム」を軸に据えることで、多くの賛同者を得やすいという点も共通して指摘できる

ところだろう。バウヒュッテ・プログラムのように、事業に対して寄附で支援する層も拡大させており、こうしたトライアングル化のプロセスは、わが国における今後の制度設計にとって示唆を与えるものと考えている。

謝辞

調査にご協力いただいた市民イニシアチブ・文化機関（バイエルン広場協会、つまずきの石・ベルリン連絡調整オフィス、ベルリンの壁博物館、青少年のバウヒュッテ・ブランデンブルク・ベルリン事務所）の皆様に感謝いたします。

また本調査は、以下の支援を受けたものである。
平成30年度山口県立大学滞在研修研究費
平成30年度科学研究費助成事業（基盤研究(C)）
18K11845

---

[i] こうした課題認識については、例えば、現代の文化的記憶の問題を扱っているコロンビア大学のヒュイッセンによる、公共の記憶をPalimpsest（羊皮紙）に準えた下記のユニークな書などが示唆的である。
Andreas Huyssen, "Present Pasts, Urban Palimpsests and the Politics of Memory", 2003：　社会的または政治的に重大な危機に直面したベルリン、ブエノスアイレス、ニューヨークの３都市における20世紀後半の歴史をはじめ、その忘却、さらにニーチェの「選択的忘却creative forgetting」に準えた選択的記憶の継承（公共記憶）の関係性を分析している。

[ii] 同小学校（Löcknitz-Grundschule）はベルリン市の西部Münchener Str. 37, Berlinに位置する。

[iii] 児童たちの取り組みについては、同校長がまとめた下記資料に詳しい。
・“Denk-mal an jüdische Mitbürger. Entstehung einer Denksteinmauer auf dem Schulgelände der Löcknitz-Grundschule Bezirk Schöneberg”, Berlin, 2011
・Christa Niclasen, "Denk-mal an juedische Buerger", 2014
筆者は、上の資料のほか、バイエルン広場協会のマグダレーネ・レッシュ氏らから示唆を得た（2018年11月21日ヒアリング）

[iv] 小学校のあるベルリン・シェーネベルク地区の犠牲者およそ6,000名が記されている。

[v] ７万個めの石は、2018年10月下旬、フランクフルト市で埋設された。

[vi] 同プロジェクトの経緯については、詳細を下記においても記した。参照されたい。
拙稿,「文化観光を通じた地域の記憶の継承手法について ～ベルリンにおける事例分析を中心に～」, 山口県立大学大学院論集, 通算第20号, 2019年３月, pp.59-66

[vii] 同プロジェクトについては、下記参考書籍、並びにつまずきの石・ベルリン連絡調整オフィスのゾーレン・シュナイダー氏らに伺った話を参考にした（2018年12月４日ヒアリング）。
・Aktives Museum Faschismus u. Widerstand ed., "Stolpersteine in Berlin: 12 Kiezspaziergänge", 2013
・Aktives Museum Faschismus u. Widerstand ed., "Stolpersteine in Berlin #2", 2014
・Hans Hesse, "Stolpersteine: Idee. Künstler. Geschichte. Wirkung.", Klartext, 2017

[viii] Silvija Kavcic, Sophia Schmitz, Soren Schneider, "Stolpersteine in Berlin - Padagogisches Begleitmaterial”, Aktives Museum Faschismus und Widerstand in Berlin, 2015

[ix] 各章の終わりには、この時代の記録ドキュメントの調べ方、アーカイブのリスト・住所等の調査に役立つ情報が事細かに収録されている。

[x] この経緯については、マヨルカ島の新聞”Mallorca Zeitung”, 2018年12月13日, 4 - 6 面等に詳しい。

[xi] つまずきの石プロジェクトに関しては、つまずきの石・ベルリン連絡調整オフィスのゾーレン・シュナイダー氏らに伺った話を参考にした（2018年12月４日ヒアリング）。

[xii] Julia Balogh & Birgit Murke, ed., “Geteilte Ansichten: Jugendliche stellen Fragen zur Deutschen Einheit”, 2015

[xiii] 同プロジェクトについては、上の参考書籍を主たる資料としたほか、ベルリンの壁博物館・和解礼拝堂・広報担当ライナー・ユスト氏に伺った話を参考にした（2018年11月６日ヒアリング）

[xiv] 同財団は、ドイツ国内で「記念物公開の日」の催しを運営していることでも広く知られている。

[xv] すでに全国的な拡大を見せ、ヴィスマール（メクレンブルクフォアポンメルン州）、ロムロッド（ヘッセン州）およびデュイスブルク/レースフェルト（ノルトラインヴェストファーレン州）、ゲルリッツ（ザクセン州）、ミュールハウゼン（テューリンゲン州）、クヴェトリンブルク（ザクセンアンハルト州）、ベル

リン市やブランデンブルク州、レーゲンスブルク市等のバイエルン州、ニーダーザクセン州、ハンブルク市、シュレスヴィヒホルシュタイン州など、さらにシュトラールズントとシュチェチンといったドイツとポーランド国境近くの地域等に拡大をみせている。

[xvi] 参加者の保険、生活費等、のべ月額750ユーロほどは、州、連邦政府、EUなど公的助成と各受け入れ機関が２対１の割合で負担。プログラムは、毎年９月１日に始まり、翌年の８月31日に終了する。

[xvii] セミナーの大区分としては、入門編、複数の中間セミナー、および最終セミナーで構成される。

[xviii] バウヒュッテ・プログラムの概要、運営実態等全般ついて、青少年のバウヒュッテ・ブランデンブルク・ベルリン事務所のベルント・ヘニング氏から示唆を得た（2019年２月13日ヒアリング）。